

特殊ロールスクリーンを製造 林口工業 (津市船頭町津興)



光熱遮断 世界の窓に

応接室の照明を消して窓のロールスクリーンを下ろすと、真昼なのに自分の手も見えないほど室内が真っ暗に。生地が両側がレールに沿って昇降するたため、たるまずなびかず、すき間なく光を遮断する。その秘訣は生地にファスナーを取り入れた技術「ZIPシステム」にある。「欧米やアジアの十二万円で特許を取っているんですよ」

と林口典雄専務(む)は誇る。巨大な窓や建物の曲線に対応し、熱や光を遮る特殊ロールスクリーンを製造する日本で唯一の会社で、一世紀の歴史がある。会長で父の精三さん(む)は木とカワフルな糸ですだれを織る機械を開発し、汚れにくく丈夫な木のすだれは外食チェーンやカプセルホテルに取り入れられていった。

一九八〇年ごろ、日本鋼管(現JFEエンジニアリング)から船員の寝室の窓のロールスクリーンを依頼される。さっそく取り付けたものの「船上は揺れが激しい。生地がぼたついてうるさいし、光が入ってまぶしい」と船員から怒られてしまった。

製造現場には国内外から仕入れた生地がロール状に積み重ねられ、縫製工場のように裁断した生地をファスナーを高周波で溶接し、長さ分のアルミのレールを切り、部品を組み立てる。ファスナーの総延長は毎年二千五百キにもなるという。最後に傷やゆがみがないか作動させて確認し、早ければ一、二週間で納品する。



「それまでの不可能を可能にする」が合言葉。約十年前、大先輩スポーツ界の強豪・流通経済大(茨城県龍ヶ崎)が卵形の斬新なデザインの体育館を新設することになった。他校の視察を受けることになった。他校の視察やマスコミから選手を守るため、内部を完全遮断しなくてはならない。レールを二重にして接触部分を半円にすることで、曲線に沿って自在に角度を変えられるようにして解決した。

「オーナーと設計者にとって建物は作品。私たちがロールスクリーンという作品で課題に答えたい」と典雄さん。新幹線500系の窓には流線形に沿った雪見窓状、東京国際フォーラムでは高さ十八メートル下から上がるタイプ、地元では百五銀行の岩田本店棟と丸之内本部棟(津市)と、さまざまな提案をしてきた。

次は「音」に着目している。典雄さんは「ロールスクリーンは視覚をオンオフする。次は聴覚を切り替えられないか」と話す。実現すれば隣の家の騒音やフライパシー漏れから利用者を守ることができるだろう。

「その次は水を遮断して水害から人を守りたい。『〇〇害』を防げるよう、技術を応用していったら」。技術と実績が増えるにつれ、可能性も広がっていく。(本間貴子)



ロールスクリーンの生地にファスナーを接着する従業員＝津市船頭町津興で



林口工業が手掛けた百五銀行岩田本店棟のロールスクリーン＝津市岩田で(林口工業提供)

1919年、木のすだれを作る会社として創業した。現在の従業員は26人。成田空港の管制塔(千葉県)、日本未来科学館(東京都)など、国内外の大型施設の窓周りを手掛けてきた。販売部門をSHY(津市船頭町津興)が担う。ロール網戸も製造しており、新型コロナウイルス感染予防のため換気する機会が増え、網戸の需要が昨年から2割以上伸びている。

2020年9月12日(土)
中日新聞 津市民版に掲載